

I

次の文章を読んで、後の問い(問1～14)に答えよ。(配点 75)

なぜ宝くじが当たったのか

皮肉なことに科学への不信感の一部は、科学への過剰な期待に由来している。災害が起きると、なぜ予測できなかったのかと、科学が糾弾される向きがある。科学者に意見をもとめれば、そこまですべては進んでいないというのが、その本心だろう。

科学は過度に信頼されるからこそ、同時に批判の対象にもなる。社会心理学者の松井豊が高校生を対象にした調査で、次の興味深い事実が判明している。超常現象などの疑似科学をシンボウする生徒は、男女ともその理由に「宗教的関心」とともに「科学の限界感」をあげているという。

科学に限界があるのは、当然である。なぜ自分がこのような人間で、彼や彼女でなく、今ここに生きているのか、という疑問に科学的な理由などはない。そうしたことに「科学の限界感」を覚え、宗教や超常現象に走る青少年が現れるのだろう。

また、科学で、宝くじが当たる確率を正確に示すことはできるが、誰に当たるかは予測できず、わからない。わからないからこそ、アといえるだろう。

しかし人間は、宝くじが当たったならば、なぜ「自分に」当たったのかと疑問を呈する。それは偶然であり、理由などないのだが、自分の人生が大きく変わったことの原因を求めてしまう。もとをただせば、それが「科学する人間の心」の現れなのである。

大事なことは、宗教や超常現象は「救い」になるのかもしれないが、衣食住や安全の提供には貢献しないということだ。データを集めて理論化し、議論して社会に応用していくといった、科学的民主的な取り組み以外に、文明を支えるI的な方法は、今のところ見出されていないのだ。

科学の限界を見きわめ、その限界付近(あるいはその外側)では何かに特別に信をおかないようにすることが、疑似科学に惑わされないためのひとつの重要な知恵だといえる。

説明できても予測ができない

科学の原理からして、一回限りの現象を「科学する」のは難しい。それでも繰り返しのパターンがチユウシュツできれば、科学になる。気象予報を見ると台風の予測進路が示されており、そこそこ予測通りに台風が動くので、気象学の予測もたいしたものだと思う。

今では、地球全体の気象モデルが立てられ、コンピュータで予測を重ねている。実際の台風が来れば新しいデータが獲得できるので、予測進路とのずれを補正してモデルを改訂し、どんどん予測精度を上げている。まさに科学が発展するプロセスそのものだ。

ところが同じ発想は、地球温暖化には適用できない。全地球規模の産業の高度化に伴う温暖化現象は、歴史上初めてのことである。科学者はこれについてもモデルを立てて予測しているが、台風のように実データで補正してモデルを改訂するという手順が行えない。だから予測が不正確でもやむをえないのだ。地球温暖化にまつわる議論が絶えないのは、科学が苦手な一回限りの現象を扱っているからである。

私たちが住んでいるこの地球は、これからおのずと寒冷化の方向に向かう公算が大きい。二百万

年ほど前に人類（ホモ属）が現れてからこの方、地球は何十回もの氷河期に見舞われている。そしてその氷河期は現代に近づくほど、より寒くかつ長くなってきている。一万二千年ほど前に最後の氷河期が終わり、地球は急速に暖かくなった。そして人類は、農業を発明し、文明を発展させることができた。そう、現代はつかの間の温暖期なのであり、気候の周期を考えると、そろそろ次の氷河期に入ってもおかしくないのだ。地球温暖化への対策も重要だが、同時に寒冷化への備えも必要なのである。

こうした一回限りの現象は検証ができないので、理論がチェックされずにリンリツする。そして当然のことながら、疑似科学が入り込みやすく、科学との識別も難しくなる。

一方の宗教は、一回限りの現象についても信者に問われれば、理由を答えてしまう。「それも神の思召<sup>おほせ</sup>召し」という具合である。このような理由では、次の予測ができるはずがない。神が登場すると何でも「後づけ」で説明できてしまうが、その実、何も予測できない「万能理論」になってしまうのだ。

科学は未来を「予測」するが、疑似科学は未来を「予言」する。予測の根拠になるパターンを科学は公開するが、予言の根拠となる靈感やら何やらをオカルトは秘密にする。ときには市民には理解しにくい数式が登場することもある科学だが、いつまでも秘密のベールに包まれている疑似科学よりは、未来の予想が当たらなくとも、かなりましではないだろうか。

## 甲

前世紀末に、「ノストラダムスの大予言」というのが流行した。十六世紀に書かれた予言の詩が、その後の世界大戦などを具体的に予言していたと、「後づけ」で語られた。そのうえ、予言の詩の一部が、一九九九年に大災害が起きるとも解釈された。すなわち一九九九年は、「大予言の検証」の年であった。

よく「予言など科学的でない」と一笑に付す傾向があるが、これには科学的知識に矛盾するという以上の理由がある。それは、予言は検証されていないということだ。科学は予測と検証のサイクルからなるので、検証されていない予言は、それが検証されるまでは信じないほうがよい、というのが妥当な態度とされる。逆にいうと、「検証されていない理論は、偶然以上に予測できない」ことが、科学の成果なのである。

検証の一九九九年になったとき、私は学生に大予言についての印象を聞いてみた。多くの学生が苦笑いする中で、ひとりが明らかに不安そうな物言いをしている。「何か心配ですか」と聞くと、「皆が騒いでいるので」とその学生は答えた。実績のある科学の成果より、生来の「他者との共感<sup>F</sup>」を優先しているように見えた。

科学的知識をいかにしっかりと身につけていたとしても、周囲の人々の意見に抗するのは難しい。私たちは集団の一員としてふるまうようにできているので、おのずと周囲の意見に合わせてしまう。だから、知識よりも噂<sup>うわさ</sup>のほうに影響力があるのだ。

一九九九年は案の定、何も起きずに推移した。予言の愛好者たちは、「マヤ暦から見て、次は二〇一二年が怪しい」と、懲りずに新しい予言を主張した。大災害が起きるとする、いわゆる終末予言は、超常現象研究家の羽仁礼<sup>はにれい</sup>が集めたところでは、過去五十年に四〇件も主張されているそうだ。

ほとんど毎年に相当する率であるから、このままではいつ大災害が起きても何かの予言は的中してしまうだろう。

それでも、東日本大震災のあった二〇一一年は、終末予言が何もなかった年だった。これで予言の反証がなされたと、私は思うのだが、そんな指摘<sup>G</sup>にしても注目されない。恐怖をあおる終末予言ばかりが相変わらず<sup>d</sup>シウモクを集めている。人間はとかく、生存を脅かす危険に目を奪われるものなのだ。

カルト宗教の団体が、よく終末予言をして信者を集めているが、たとえ、その予言の年になって何も起きなくとも、予言の日を先延ばしにして生きのび続けている。ときには、自ら爆弾などで終末を演出して、予言を自己<sup>e</sup>ジョウジュする例もたびたび見られる。

予言にかかわらないほうがよいという事実が、着々と積み重なっている。

### 創造説は有用か

<sup>H</sup>人間はサルから進化したという科学理論を認めない考え方があつた。神が人間をつくり、次にサルを人間に似せてつくつたという創造説である。考えてみれば、「人間とサルは同じ仲間だ」と分析されるよりも、「人間は神によって選ばれた特別な存在だ」と説かれるほうが素直に心地よい。気持ちのよいものを選んでしまうのは、人間の本性のなせる業なのだ。

また、人々が創造説を選びやすい理由は他にも指摘できる。それは、ある現象が起きたときに、人間はそれが自然に起きたと認識するよりも、主体的意図によって起こされた<sup>e</sup>と認識する傾向が強いということである。社会集団の中では、後者の認識のほうが役に立つ。誰かが起こした現象ならば、その人にかけて合つて現象を起こさないように頼みこむことができるからだ。ゆえに、人間はどのように認識する傾向が強いのだ。

一方、創造説の指摘にも一理ある。生物の進化はあまりにも速く、複雑な機能が次々に生まれてくるので、現在の進化論では説明がしにくいという批判などは、確かにその通りである。だが、科学の最先端にミステリーが残されているのは、別に不思議でも何でもない。それに、大きな進化が起きた状況は、生物の歴史に埋もれており、今からデータを収集するのが難しいのだ。生物進化の科学が進みにくいのも、そういう理由を考えれば当然のことといえるだろう。

つまり、科学の説明に難点があるからといって、神による創造説に軍配があがるわけではないのだ。神は何でも説明できるが、予測はしない存在なのである。だから、信仰の対象になつても、科学的究明の役には立たないわけだ。一方の進化論は、遺伝情報や脳の科学に支えられ、生物学だけでなく生理学や心理学に、ゆつくりではあるが多大な貢献をしはじめている。

このように、社会でどのくらい役に立っているかという応用性や、科学としての営みがどの程度重ねられてきたかという Ⅱ 性が、科学と疑似科学を識別するための、大きな手がかりとなるのだ。

(石川 幹人「なぜ疑似科学が社会を動かすのか」)

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は  ～  。

a シンポウ

b チュウシュツ

c リンリツ

d シュウモク

e ジョウジュ

問2

空欄

・

にそれぞれ一つ選べ。空欄 I の解答番号は  、空欄 II の解答番号は  。

- ① 客観      ② 歴史      ③ 不変      ④ 意識      ⑤ 空想  
⑥ 主観      ⑦ 実用      ⑧ 反証      ⑨ 論理

問3

空欄

一つ選べ。解答番号は  。

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

- ① 宝くじは賭け事とは異なる  
② 宝くじの予測屋が登場する  
③ 宝くじも超常現象に当たる  
④ 宝くじとして成立している  
⑤ 宝くじの売り上げが落ちる  
⑥ 宝くじ人気が低迷している

問4 傍線部A「科学が糾弾される向きがある」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 科学に対して過度に信頼しているあまり、科学の進歩からすれば災害の予測ができて当然と考える人がいるから。
- ② 科学に対する過剰な期待を持っているため、科学にも限界があるということを受け入れるのに躊躇する人がいるから。
- ③ 科学に対する世間の信頼が厚いゆえに、宗教や超常現象に走る人たちのなかには科学に対して抵抗する人がいるから。
- ④ 科学に対する不信感があるため、災害の予測ができない科学の限界に対して強い憤りを感じる人がいるから。
- ⑤ 科学に対する不信感の一部が宗教的関心の強さにつながり、科学が「救い」を与えぬことに不満を抱く人がいるから。
- ⑥ 科学に対する過剰な期待感が科学の限界感に変質し、科学が災害を予測できないことに対して不信感を持つ人がいるから。

問5 傍線部B「それ」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 宝くじが当たったこと
- ② 宝くじが当たる理由を考えること
- ③ 宝くじが当たったのはただの偶然であること
- ④ 宝くじが当たったのには理由がないと考えること
- ⑤ 宝くじが当たり、自分の人生が大きく変わったこと
- ⑥ 宝くじが当たり、自分の人生が大きく変わったことの理由を求めること

問6 傍線部C「同じ発想」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

解答番号は

11

- ① 一回限りの気象現象から気象モデルを作成し、コンピュータを使うことで予測精度を高めながら正確な予測を行っていくという考え。
- ② 歴史的にいくども発生する現象から普遍的なパターンを見つけ出すことにより絶対的な分析モデルを確定し、それに基づいて予測していくという考え。
- ③ 繰り返し発生する現象の観測データからモデルを構築し、実データで補正してモデルを改訂していくことによって予測精度を高めていくという考え。
- ④ 歴史上繰り返し起こる気象現象に着目することで一つの仮説を設定し、その仮説に当てはまる現象を選定することでより正確な予測を行っていくという考え。
- ⑤ 繰り返し発生する現象のなかからパターン化された断片を拾い出し、コンピュータを使ってそれらの断片を再合成したモデルに基づいて予測するという考え。
- ⑥ 歴史的に繰り返し返す各現象の観測データをすべて生かしていくことで全体モデルを構築し、帰納的に予測精度の向上をはかっていくという考え。

問7 傍線部D「神が登場すると何でも『後づけ』で説明できてしまう」の説明として最も適当な

ものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

12

- ① 起きた現象はすべて神が登場させることにより、信者にとって後の信仰心を高める材料になるということ。
- ② 起きた現象は決して一回限りのものではなく、神の思し召しによって今後も繰り返し起こる現象として説明できるということ。
- ③ 起きた現象は一回限りのものであったとしても、神の力によってこれからも起きうるものができるということ。
- ④ 起きた現象はいずれも神が登場することで後世になっても繰り返し起こる現象として収束させられるということ。
- ⑤ 起きた現象はすべて神の意向によるものであるというように、後から理屈をつけて説明できるということ。
- ⑥ 起きた現象はどれも神の思し召しで起こったものであり、後になって信者の身につくものであるということ。

問8 傍線部E「未来の予想が当たらなくとも、かなりましではないだろうか」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **13**。

- ① すべての現象を神の思し召しとして説明する疑似科学とは異なり、科学は未来について当たらないことがあるにせよ、根拠を公開して予言しているから。
- ② 予言の根拠を秘密にする疑似科学とは異なり、科学は未来の予測が外れることがないよう予測の根拠となるパターンを公開しているから。
- ③ 靈感などといった秘密のベールに予言の根拠が包まれている疑似科学とは異なり、科学は一回限りの現象からでも正確な予測を行えるから。
- ④ 予言の根拠を公にしていない疑似科学とは異なり、科学は予測の根拠を明示しているため、予測が不正確であったとしても疑似科学よりは誠実な態度であるといえるから。
- ⑤ 神の思し召しや靈感など予言の根拠が秘密のベールに包まれている疑似科学とは異なり、科学は当たらないことはあっても「万能理論」に近づく努力をしているから。
- ⑥ 一回限りの現象でも「後づけ」によって検証を行うことができる疑似科学とは異なり、科学は未来の予想が当たらなくとも予測すること自体に意義があるから。

問9 傍線部F「『他者との共感』を優先している」に最も近いものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **14**。

- |                             |        |         |
|-----------------------------|--------|---------|
| ① 流れに棹 <small>さし</small> さす | ② 付和雷同 | ③ 自己喪失  |
| ④ 予定調和                      | ⑤ 意気投合 | ⑥ 言わぬが花 |

問10 傍線部G「そんな指摘をしても注目されない」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **15**。

- ① 二〇一一年は終末予言がなく、東日本大震災にだれも関心を持たなかったから。
- ② 東日本大震災で大損害を被り、予言の反証にはだれも関心を持たなかったから。
- ③ 予言の反証は東日本大震災が発生した年に限らず、以前から行われていたから。
- ④ 恐怖をおおる終末予言よりも東日本大震災の方が恐怖を与えるものであるから。
- ⑤ 予言が反証されたということよりも生命に関する危険の方が関心を集めるから。
- ⑥ 終末予言はほぼ毎年のようになされており、予言の反証はよくあることだから。

問11 傍線部H「人間はサルから進化したという科学理論を認めない考え方」に最も当てはまらないものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **16**。

- ① 人間をつくったのは神である。
- ② 人間は神によって選ばれた特別な存在である。
- ③ 生物の進化を説明するための十分なデータ収集が必要である。
- ④ 生物の進化はあまりにも速いため、現在の進化論では説明がしにくい。
- ⑤ 世の中の出来事はすべて神の主目的意図によって引き起こされている。
- ⑥ サルは人間と同じ仲間ではなく、神が人間に似せてつくったものである。

問12 傍線部I「科学の説明に難点があるからといって、神による創造説に軍配があがるわけではない」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **17**。

- ① 大きな進化が起きた状況は生物の歴史に埋もれているため、今からデータを収集するのが難しいと進化論を批判する創造説には一理あるが、創造説は信仰の対象になっても科学的究明には役立たないという点で進化論に勝つていえるわけではない。
- ② 科学の最先端にミステリーが残されていることに何の不思議があるのかと開き直る進化論の説明姿勢に難があるのは確かであるが、進化論は社会で十分に役立っており、単に人々に救いを与えるだけの創造説が進化論より秀でているとは必ずしも言えない。
- ③ 現在の進化論は生物の進化的現象が主体的意図によって起こされているということを認めない点で欠陥を抱えているものの、生物学や生理学、心理学に対して大きな貢献をしており、このことを踏まえれば創造説が進化論より進んでいるとは必ずしも言えない。
- ④ 生物進化の科学は生物の複雑な機能や大きな進化をとげた状況に対して十分に納得のいく説明を提供できていないという限界を持っているものの、創造説は進化論に対してなるほどと思わせる批判が全くできておらず、この点で進化論に勝つているとは必ずしも言えない。
- ⑤ 人々の信仰の対象になり続けている創造説とは異なり、進化論には予言を通して人々に救いを与えることができないという弱点があるものの、進化論は生理学や心理学の発展を支えており、創造説はこうした応用性の点で進化論より優位にあると言えるわけではない。
- ⑥ 説明がしにくい複雑な機能が次々と生まれているという事情や大きな進化に関するデータを今から収集するのは困難であるという事情が進化論にはあるものの、何の予測もせず社会に貢献しているとは言えない創造説が進化論よりも優れていると言えるわけではない。

問13

空欄

甲

に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

から一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 終末予言が生きのび続ける理由
- ② 予言は科学的知識とは矛盾する
- ③ 予測と検証のサイクルこそ科学
- ④ 懲りずに新しい予測が生まれる
- ⑤ ノストラダムスの大予言の流行
- ⑥ 終末予言の反証は注目されない
- ⑦ 科学的知識よりも噂に力がある
- ⑧ 人間は生存を脅かす予言を好む

問14

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

19

20

- ① 世界大戦などを具体的に予言していた「ノストラダムスの大予言」は十六世紀に書かれた予言の詩であり、その中で一九九九年に大災害が起きるとの予言がなされ、二十世紀末に流した行したが、実際には何も起きず、後に新しい予言を主張する者は現れなかった。
- ② 人類誕生から現在までに地球は何十回もの氷河期に見舞われ、一万二千年ほど前に最後の氷河期が終わり急速に温暖化したのが、気候の周期を考えるとそろそろ氷河期に入ってもおかしくない時期であり、いまは温暖化対策ではなく寒冷化への備えをすべきである。
- ③ 進化論よりも神による創造説の方が世界的に支持されているということについては、創造説が信仰の対象となって人々に多くの「救い」をもたらしてきたという事実とともに、その主張が進化論よりも心地よい内容になっているという事情があることも指摘できる。
- ④ 宝くじが当たる確率を正確に示すことはできても、宝くじが誰に当たるかまでは予測できない点に科学の限界があるが、それが逆に宝くじがなぜ「自分に」当たったのかを考えることにつながり、疑似科学に惑わされない「科学する人間の心」の現れとなるのである。
- ⑤ 人間は生存を脅かす危険に目を奪われ、恐怖をあおる終末予言に引きつけられやすいところがあるため、カルト宗教の団体は終末予言をして信者を集め、ときには自ら爆弾などで終末を演出することにより予言の日を先延ばしにしながら生きのび続けている。
- ⑥ 人間は集団の一員としてふるまうようにできており、おのずと周囲の意見に合わせてしまうため、実績のある科学の成果を忘れて疑似科学になびいてしまいやすいが、これを防ぐためには科学の成果を理解し、科学的知識を十分に身につける必要がある。
- ⑦ 疑似科学が受け入れられている理由のひとつに「科学の限界感」があり、科学に限界があるのは確かであるが、疑似科学に惑わされないためのひとつの方法としては、科学の限界を見きわめ、その限界付近では何かに特別に信をおかないようにすることが挙げられる。
- ⑧ 科学は、社会でどの程度役に立っているかという応用性を満たしているとともに、予測と検証のサイクルからなっているものであるが、疑似科学は未来を「予言」することはできても応用性を満たしておらず、その予言も検証されていない点で科学と識別されるものである。
- ⑨ 全地球規模の産業の高度化に伴う地球温暖化現象のような、歴史上初めてとなる一回限りの現象は、検証ができないため科学にとって取り扱いが不得手な現象であり、これまで未来予測を重ねてきた疑似科学にとっては入り込みやすい現象であると言えることができる。

II

次の文章を読んで、後の問い（問1～12）に答えよ。（配点 75）

甲

知識をめぐって近代社会で立ち現れた問題は、知識に所有権があるのかという問いであった。この問いに対して、「アイデアや知識に一定の財産権を与える」と応<sup>こた</sup>えるのが特許制度である。特許制度は、発明を I する代償に、その発明者の II な使用权を主権者が認め、その使用の利益を III 保護するという制度である。知的財産権を認めることによって、発明をシヨウレイ<sup>a</sup>し、産業をシンコウ<sup>b</sup>させるという考えである。ただし知識の使用に「独占権」を与えるため、その知識を自由に（対価なしで）使う場合と比<sup>A</sup>べて社会的余剰を低下させる効果を生む。しかし新しい知識をすべて公開し、ブランドを全く自由に使えるようにしてよいのだろうか。ブランドネームを築き上げるため多額の「投資」をしてきた企業を、突然現れた後発の競争相手が打ち負かすことがある。先発企業が発明やブランドの確立のために投じてきた費用を回収できないとすれば、それは公正さを欠くのではないかという感覚を誰しも持つはずだ。

IV 的には、特別な技術の発見者に対して、王が特別の権利と特権的シヨグウ<sup>c</sup>を与えるというケースは、西洋中世世界にも存在した。しかし、憲法の枠組みの中で知的財産権が認められたのは、米国や革命後のフランスであった。これらのデモクラシー国家で初めて、憲法に基づいた知的財産権に関する法律が制定されたのだ。一九世紀に入ると、こうした先例をモデルとしてつづヨーロッパの主要国やブラジル・メキシコも「特許法」を制定した。しかしその後一九世紀半ばごろから、知的財産権を否定する反<sup>注</sup>パテント（anti-patent）運動が起<sup>り</sup>はじめる。

こうした反パテント運動が起<sup>こ</sup>った原因のひとつは、パテントという概念そのもの<sup>V</sup>のさ<sup>さ</sup>にあった。一口に「特許法」といっても、その内実は幾多の難題を抱えるものであった。何を<sup>も</sup>って新奇（novel）かつ有用（useful）とするのか。そもそも自然の法則を見つけたこと（つまり「発見」と発明はどう区別されるのか、既知の技術を新たに結合したものはパテント化できるのか、ほぼ同時に発明がなされたようなケースでは、何を<sup>も</sup>って「先であった」と判断するのか。発明した時点なのか、出願の時点なのか。どれほどの期間、パテント技術に独占的利益を認めたらよいのか。こうした問題は決着がつきにくい。

特許制度は発明を刺激する、という主張についても問題なしとしない。人が何かを発明するのは、必ずしも経済的な利益を目的としているわけではない。単なる知的好奇心から、あるいは個人的な名<sup>な</sup>誉心から、といった動機もあるからだ。こうした動機の複雑さも、特許の是非を論ずるとき考慮する必要がある。

B 筆者は、アイデアなり知識の使用が、著作権など法律で守られていることを不合理に感じたことがあった。もう十数年以上も前のこと、一高寮歌の歌詞を紹介しながら日本の旧制高校生のエリート意識について論評したことがあった。あの「栄華の巷<sup>ちやう</sup>低く見て」あるいは「濁れる海に漂える我国民を救わんと」などの歌詞がどうも鼻<sup>c</sup>持ちならないと書いた。その原稿が本になる前に、編集者から思いがけない事情を説明された。「あの長さの歌詞の引用には日本音楽著作権協会（JASRAC）からの利用キョダク<sup>d</sup>が必要ですよ」というのだ。その際、著作物利用料の徴収問題も生まれるといわれて驚いたものだ。楽曲や歌詞の著作権者の権利を一定程度保護するということはわか

る気もしたが、すでに亡くなった人にとっては「使用されることは名誉」なのに、その権利を第三者が経済的に守るといえるのはどういふことなのだろうか、という疑念が湧いた。「音楽文化の普及発展に資する」ことに主眼があるのなら、こうした芸術的著作の成果の第三者による仲介業の「独占」は逆効果ではないかと感じたのである。

VI のもの、特に思索による成果・業績を「知的財産」として認め、その所有権を保護することによって、製作者の経済的利益を守り、知的活動を活性化するという論理はわかる。しかしあの一高寮歌「春爛漫の花の色」「嗚呼玉杯に花うけて」を作詞した一高生、矢野勘治に、そのような意識はあったのだろうかという疑問は消えない。JASRACが過去の音楽上の著作物に対して「保護する」というのは、仲介業者による「知的独占」ではないかと。

知的財産権の中には、芸術・学術上の著作物、実演、CDやDVDなどの複製芸術品、発明、科学的発見、意匠、シヨウヒヨウなど「人間の創造的活動によって生み出されたもの」が多く含まれる。こうした創造的活動を活発にするための法律が「知的財産基本法」である。一定期間、知的創作物の利用をその創作者のみに排他的（独占的）に認めることによって、模倣者が直ちにその利益に与ることを阻止するのが目的である。さもないと発明や発見を行おうとする意欲が衰退する、というのが通常主張される主な理由なのである。

こうした論理をなんとなく信じている人は多い。他面、例えばパテントを取得している医薬品が「独占力」で極めて高価になり、その薬剤を必要としている沢山の患者の手に届かない、といった知的独占の弊害もある。エイズの特効薬がパテントで保護されたため極めて高価になり、緊急にその特効薬を必要とする貧しいアフリカの患者が買えないという事実、経済倫理の問題として激しく議論されたことは記憶に新しい。

### 知識の共有化と生産性

それにしても、パテントによる独占権がないと、本当に人は発明や発見に励まないのだろうか。アルキメデスもピタゴラスも、自らの発見した真理に対して、使用料を請求したい気持ちを持ったのだろうか。この問題に最近明白な理論的解答を与える研究が本としてまとめられた。ミケール・ポルドリン、デヴィッド・K・レヴァイン『〈反〉知的独占―特許と著作権の経済学』である。著者は、「知的財産権」は、著者や発明者を特権化し、仲介業者に莫大な利益をもたらす「知的独占」だから廃止すべきだと理論的・実証的に説明する。著者たちは、知的財産権がなくても、発明や創作は行われてきたのであり、知的財産権の保護は **A** のを防ぐために使われることが圧倒的に多く、イノベーションの阻害要因になると論じている。少なくとも、過去の著作物の利用を困難にする「知的財産権」は、デジタル情報が安価に流通する現代においては、その根本が見直されるべきだろう。ちなみに同書は著作権を取ってはいるが、著者たちは自分のウェブサイトに全文を無料公開している。多くの場合、こうした無料公開には、かえって本の売り上げを促進させる効果が認められるようだ。

こうした「反知的独占」に関して、アナリー・サクセニアン『現代の二都物語―なぜシリコンバレーは復活し、ボストン・ルート128は沈んだか』は先端技術に関する興味深い実例を示しているの **E** でここに紹介しておこう。

一九七〇年代のアメリカのコンピュータ産業は、MITをバックにするボストン近郊のルート128を本拠地にしていた。しかしその後、スタンフォード大学に近いシリコンバレーの追い上げに遭い、ルート128は敢えなく敗退する。その原因は双方のエンジニアの労働市場の構造の違いによるとサクセニアンは論じている。シリコンバレーはエンジニアが流動的で地域内の企業間を移動し、競争企業同士がアイデアを自由に交換するという文化を共有しているという。エンジニアが企業を移動しても、元の企業で使われたアイデアを活かす自由は許された。この点、ルート128の企業間の「ルール」は根本的に異なり、秘密主義が徹底していた。シリコンバレーでは新しい知識が企業を超えて普及していったのに対して、ルート128では、エンジニアは転職する際、一、二年の間はライバル企業に就業することが禁止されていたのである。このような、企業間での知識の流出・流入を避ける（共有化を避ける）ルート128の体制が、自由な普及を認めたシリコンバレーの体制に敗れたというのが、サクセニアンの推理の結論であった。

企業ないしは企業群の衰退には多くの要因がありうるため、この「二都物語」の栄枯盛衰の例が、「反知的独占」の十分な証明になっているのかどうか、さらに多角的な検証が必要とされる。しかし次のことは確かであろう。知的独占か反独占か、おそらくこの難問の解は、(1)新しいアイデアが生まれるような刺激を与えること（革新者への報酬）、(2)そのアイデア自体を社会的に共有し、多くの人が利用できるようにすること（技術革新の普及）、の中間にあるのだろう。この中間に存在する「最適点」を選びだすことが必要なのであって、いずれの「端点」もベストの解にはならないようである。

知的独占の是非に関する議論は、技術・知識の公共性・公益性の問題以外に、その分野での革新の速度によって変わってくる可能性がある。先に引用した「二都物語」の場合は、少し前の知識がたちまち陳腐化するような超スピードの技術競争のケースであった。新しい技術を開発しても、二番手にすぐ追いつかれてしまうような場合、独占的な立場を守ること<sup>f</sup>に拘泥するのはあまり賢明ではない。常に「ご破算」<sup>F</sup>からの出発で（「雪だるま」型ではなく）競争をする場合には、他社の技術者との知識と情報の交換は相互に極めて有益になるからだ。

（猪木 武徳「経済学に何ができるか―文明社会の制度的枠組み」）

（注） パテント…特許、特許権。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～f のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は  ～  。

a	シヨウレイ	<input type="text" value="21"/>
b	シンコウ	<input type="text" value="22"/>
c	シヨグウ	<input type="text" value="23"/>
d	キョダク	<input type="text" value="24"/>
e	シヨウヒヨウ	<input type="text" value="25"/>
f	拘泥	<input type="text" value="26"/>

問2 空欄  ～  に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の

①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は  。

①	Iー公開	IIー公共的	IIIー包括的に
②	Iー公表	IIー二次的	IIIー永続的に
③	Iー公開	IIー独占的	IIIー一定期間
④	Iー秘匿	IIー排他的	IIIー段階的に
⑤	Iー秘匿	IIー独占的	IIIー永続的に
⑥	Iー秘匿	IIー公共的	IIIー一定期間
⑦	Iー公表	IIー排他的	IIIー段階的に
⑧	Iー周知	IIー二次的	IIIー包括的に
⑨	Iー周知	IIー公共的	IIIー一定期間

問3 空欄    に入る語として最も適当なものを、次の①～⑧のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は  ～  。

① 実践 ② 論理 ③ 理論 ④ 歴史  
⑤ 思想 ⑥ 倫理 ⑦ 社会 ⑧ 世界

① 新奇 ② 曖昧 ③ 安易 ④ 莫大  
⑤ 不合理 ⑥ 不条理 ⑦ 慎重 ⑧ 広大

① 既知 ② 未知 ③ 公知 ④ 天与 ⑤ 無限 ⑥ 有限 ⑦ 有徳 ⑧ 無形

問4 空欄  に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は  。

- ① 資本主義経済が崩壊する
- ② 富者だけに有利にはたらく
- ③ 企業間の自由な競争を活性化する
- ④ 過去の著作物が安易に模倣される
- ⑤ 先発企業と後発企業の競争が激化する
- ⑥ 既得権益者が後発による改良によって追いつかれる

問5 傍線部A「比」と楷書体で同じ総画数の漢字を、次の①～⑦のうちから二つ選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答は解答番号  の二ヶ所にマークすること。

- ① 収
- ② 包
- ③ 乏
- ④ 以
- ⑤ 乞
- ⑥ 丘
- ⑦ 弓

問6 傍線部B「筆者は、アイディアなり知識の使用が、著作権など法律で守られていることを不合理に感じた」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 故人の楽曲や歌詞を仲介業者である第三者が保護することは、故人の経済的利益を損ねるだけでなく、名誉も傷つけることになると感じたから。
- ② 故人にとって自分の楽曲や歌詞が使用されるのは名誉であるにもかかわらず、第三者がその著作物を保護することは、作者の名誉を傷つけることになると感じたから。
- ③ 故人にとって自分の楽曲や歌詞が使用されるのは名誉であるにもかかわらず、第三者がその著作物を保護することは、作者の経済的利益を損なうことになると感じたから。
- ④ 筆者がかつて一高寮歌の歌詞自体を論評した際に、その歌詞の法外な利用料をJASRA Cから徴収される体験をしたから。
- ⑤ 知的創作物の権利を法律で保護することの主眼は、文化の普及発展に貢献することにあるはずなのに、第三者による仲介業の「独占」がその主眼とはむしろ逆効果になっていると感じたから。
- ⑥ 知的創作物の権利を法律で保護することの主眼は、文化の普及発展に貢献することにあるはずなのに、第三者による仲介業の「独占」が作者の創作意欲を衰退させる要因になっていると感じたから。

問7 傍線部C「鼻持ちならない」の意味として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 合点がいかない
- ② しつくりこない
- ③ 我慢できない
- ④ 気取っている
- ⑤ 下品な態度である
- ⑥ 高圧的な態度である

問8 傍線部D「この問題」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

解答番号は 35。

- ① 『〈反〉知的独占―特許と著作権の経済学』において提起された問題
- ② パテントによる独占権がなくても、人は経済的利益のために発明や発見に励むかどうかという問題
- ③ パテントによる独占権がなくても、知的好奇心から発明や発見に励む権利が我々にはあるという問題
- ④ パテントによる独占権がなければ、人は発明や発見に励まなくなるのかどうかという問題
- ⑤ アルキメデスもピタゴラスも、自らが発見した真理に対して、使用料を請求できたかもしれないという問題
- ⑥ アルキメデスもピタゴラスも、自らが発見した真理に対して、使用料を請求できたにもかかわらず請求しなかったという問題

問9 傍線部E「興味深い实例」である理由として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一

つ選べ。解答番号は 36。

- ① 『〈反〉知的独占』の全文をウェブサイトで無料公開したところ、その売上げが伸びたこととは、きわめて珍しい实例であるから。
- ② 『〈反〉知的独占』のように、ウェブサイトで全文を無料公開した書物の多くが売上げを伸ばしていることは、常識では考えられない实例であるから。
- ③ MITという有名大学を後ろ盾にしていたにもかかわらず、ルート128の企業がシリコンバレーの企業に敗退しなくなること、先端技術に関してはそれまで起こりえなかった珍しい实例であるから。
- ④ MITを後ろ盾にしていたルート128の企業がシリコンバレーの企業に敗退した原因を、雇用形態や人材育成制度に着目しながら、反論の余地がないほど見事に証明した实例であるから。
- ⑤ 実証することが困難だと考えられていたルート128とシリコンバレーの半導体企業間の競争原理を、雇用形態や人材育成制度に着目しながら、理論的に見事に解明した实例だから。
- ⑥ 『〈反〉知的独占』と同様に、『現代の二都物語』は、「反知的独占」に対して異議を唱えている实例であるから。
- ⑦ 『現代の二都物語』は、少し前の知識がたちまち陳腐化するような超スピード技術競争の端的な实例であるから。
- ⑧ 知識の流出・流入を避けるため秘密主義を徹底したルート128の体制が、知識の自由な普及を容認するシリコンバレーの体制に敗退したことは、「知的独占」に疑問を投げかけることになる实例だから。

問10 傍線部F「ご破算」の意味として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は **37**。

- ① 借金を返済できず破産すること
- ② 借金を自力で返済し一から出直すこと
- ③ 借金を肩代わりしてもらえず破産すること
- ④ 借金を肩代わりしてもらい一から出直すこと
- ⑤ 今まで行ってきたことを台無しにしてしまうこと
- ⑥ 今まで行ってきたことを白紙の状態に戻すこと
- ⑦ 今までの失敗を後悔し挽回ぼんがいしようとする事
- ⑧ 今までの失敗を挽回し大成功を収めること

問11

空欄

**甲**

に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

から一つ選べ。解答番号は **38**。

- ① 反パテント礼賛らいさん
- ② 反パテントへの反感
- ③ 知的財産制度の盲点
- ④ 知的財産制度の弱点
- ⑤ 知的財産制度の光と闇
- ⑥ 反パテントは反社会的か
- ⑦ 知的独占は社会に益があるか
- ⑧ 知的独占は法的妥当性をもつか

① 「〔反〕知的独占―特許と著作権の経済学」の著者たちは、「知的財産権」がなくても発明や創作が行われてきた事実と「知的財産権」がイノベーションの阻害要因にしなければならない事実を論拠に、仲介業者に莫大な利益をもたらす「知的独占」にすぎない「知的財産権」の廃止を主張している。

② かつてアフリカにおいてエイズの特効薬がパテントで保護されていたために価格が急騰し、その特効薬を緊急に必要としている貧しいアフリカ人患者の多くが手に入れることができなかったという事実は、経済理論から見ても、「知的独占」の弊害を端的に物語る実例にほかならない。

③ 「春爛漫の花の色」「嗚呼玉杯に花うけて」という歌詞が含まれる一高寮歌をはじめとして、日本音楽著作権協会が過去の音楽上の著作物を「保護する」ことは、作者の経済的利益の観点からだけでなく、文化の普及発展の観点からも必要不可欠な措置である。

④ 一高寮歌の作詞者である矢野勘治が日本音楽著作権協会による経済的利益の保護を求めていたかどうかは不明であるが、少なくとも自分の曲が後世に残るということに「名誉」と「誇り」を感じていたことだけは確かである。

⑤ 憲法に基づいた知的財産権に関する法律が米国や革命後のフランスというデモクラシー国家において初めて制定され、一九世紀に入ると欧州の主要諸国や中南米の一部の国も「特許法」を制定したが、一九世紀半ばごろから知的財産権を否定する反パテント運動が世界全体に広がり始めた。

⑥ 知的独占か反独占かという難問に答えるためには、一方の「端点」である、革新者に報酬を与えることと、もう一方の「端点」である、技術革新が社会的に広く普及することとの間に存在する「最適点」を選びだす必要がある。